

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

市民が守った第五福竜丸・保存のよびかけから 40 年

保存・展示された福竜丸を沢山の人が訪れる。写真右上・子ども達を案内するボランティアガイド。右下・増える高齢者のグループ見学。左上・大学生一〇人が展示館で授業、大石又七さんが講義。左下・太平洋の地図を指でたどりガイドの話聞く見学者



明けましておめでとぅございませう

財団法人第五福竜丸平和協会会長

川崎昭一郎

マーシャル諸島核の世紀(出版)

裁きなきビキニ水爆被災(出版)

女性科学者の闘い(NHKクローズアップ現代)

当財団法人に連なるエキスパート、大御所、若手による最新の研究成果のタイトルのいくつかをランダムに挙げてみました。

ビキニ事件がいかに大きな広がりをもっているか、そして今日に至るも重要な研究課題を投げかけているかがわかります。

本年は、二六歳の一青年の新聞投書で第五福竜丸保存への一石が投ぜられて四〇周年に当たります。

先輩達の血と汗のご努力で船が立派に保存・展示されて三〇年以上が経過します。毎年十万人を超える人々が見学・勉強に訪れますが、来館された大人にも子どもたちにもひとしく平和の大切さを心に刻んでくれます。

また、船そのものが存在することにより、絶えず新たに若い意欲的な研究者にこの事件への学問的関心を呼びおこし、日本の平和研究に国際的な視野と内容的な深さを与えてきました。

日本人だからこそ取り組むべき課題であり、また、複雑な現代社会における人類の在り方を問う基本的根源的テーマでもあります。

船と展示館の外見的整備と併せて、文献資料、セミナー、研究者ネットワークづくりにも一層力を入れたいと思います。本年も皆様のご支援ご鞭撻をよろしくお願い致します。

親子二代で福竜丸

夏休み自由研究三〇年前と今と

夏休みの自由研究に第五福竜丸を選んだ、千葉県習志野市の伊藤雅菜さん（小学六年）が、作品をもって家族で来館しました。雅菜さんは展示や本で調べたことを紙芝居にまとめました。事実を並べるだけではなく、どうすれば伝わるかと考えて構成した作品は、マシヤルの被害や棄てられたマグロの気持ちも書き込まれています。「原水爆は人としてやってはいけないこと」

と作品はしめくられます。

父親の浩さんも六年生のときに自由研究に福竜丸を選んだとのこと。お父さんの作品は、作文と新聞切抜きを貼った壁新聞です。雅菜さんも妹さんとお母さんも初めて見るお父さんの作品に興味津津で「新聞を使っているのはなかなか」と高い評価でした。

浩さんから親子で訪ねての一文を寄せていただきました。

伊藤浩さんの寄稿文

三一年前の夏、小学校六年生だった私は、母に連れられ開館したばかりの第五福竜丸展示館に来ました。当時の展示館周辺は今のような緑もほとんどなく、照りつける夏の太陽がとても暑かったことを鮮明に覚えています。展示館に連れてこられるまでは、私は広島、長崎以外にも日本に原水爆の被害者がいることを知らず、戦後の核実験でこの

ような悲劇がおきていたことに、子どもなりに驚いた記憶



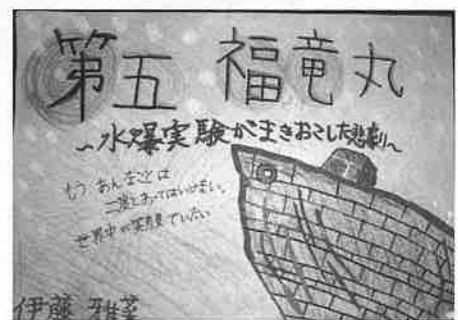
親子二代の作品と伊藤さん一家

があります。今も展示館の脇にある石碑に刻まれた「原水爆の被害者は、私を最後にしてほしい」という久保山愛吉さんの言葉が印象に残り、この歳まで覚えていました。

夏休みに入ったところだったため、母の勧めもあって、学校の自由研究に第五福竜丸をテーマとして取り上げました。その後は展示館に足を運ぶこともなく、時々第五福竜丸の記事などをみたときに思い出すことがあっただけでしたが、上の子どもが六年生になり、三〇年前と同様、夏の暑い時期に家族で展示館を訪れました。

第五福竜丸は当時のままありました。しかし、核兵器や世界平和に関する状況は三〇年前と大きく異なっており、子どもたちに第五福竜丸の意味するものをどう説明したらよいか、おおいに戸惑いました。

私が小学生だった頃は、世界平和に関して東西冷戦という状況でしたが、子ども心に、いざ世界は平和になるだろうと思っていたような気がします。ところが三〇年たった現在、世界各地でなお



雅菜さんの作った紙芝居

様々な紛争が絶えず、世界平和への道のりははるか遠いものになっています。結局、第五福竜丸を夏休みの自由研究のテーマにしたいと言った六年生の子どもには、展示されている資料を見ながら第五福竜丸や核兵器などに関する事実のみを話し、あとは自分自身で資料を調べつつ、自分なりの感性をもって第五福竜丸の意味するものを考えさせるようにしました。

夏休みに実家に帰って探してみると、三〇年前の私の自由研究のポスターが出てきました。子どもが自分で考えて第五福竜丸の自由研究を完成させるまでは、私の自由研究がみつかったことは隠して

いましたが、茶色に変色した三〇年前の小学生が書いたポスターと、現在の小学生が書いた作品とを比べてみると、第五福竜丸の語りかけるものも少しづつ変わってきているのかなとも思います。

第五福竜丸はこの三〇年間決して安泰だったわけではなく、腐敗が進んで保存が危機的な状況にあったことも今回初めて知りました。この危機を乗り越えて保存にあたってこられた関係者の方々のご尽力には頭が下がる思いです。このような保存への努力があったからこそ、自分の子どもたちも、そして私自身も再び、第五福竜丸を見て考える機会に恵まれたのだと思います。

果たして三〇年後、母親になった子どもたちはその子どもを連れて第五福竜丸を見に来てくれるでしょうか。そのとき、第五福竜丸は親子に何を語りかけるのでしょうか。今までの三〇年、これからの三〇年、世界平和への道のりは決して容易なものではありませんが、第五福竜丸がいつまでも航海を続けていくように祈念してやみません。

病室の久保山さんを取材して

— 放送記者の回想

鈴木茂夫

風化した取材ノートに、鮮烈な時間が息づいていた

昭和二九年夏……
日本国民は一人の男の病状を気遣っていた。

三月一日、中部太平洋マリーシャル海域で一隻のマグロ延縄漁船がアメリカの水爆実験による死の灰を浴びて帰港。放射能症に冒されていることが判明したからだ。

国立東京第一病院三階南病棟一一号室、そこが第五福竜丸無線長・久保山愛吉さんの病室だ。小山副院長、熊取主治医が懸命の治療に当たって



久保山さんと看護の家族

いる。しかし、治療法は確立されていない。

八月末、小康状態だった病状が悪化。

このため、報道陣は、病院前の小旅館に泊まり込みを始めた。

私もその中の一人だった。この年の春、ラジオ東京（現TBS）に入社した録音ニュースの制作のディレクター。

病状発表が一日に三回になった。

「体温三六度八分、脈拍九〇、呼吸一八……」

この内容から、病状をどう読み取ればよいのか。私にはまるで分からない。知り合いの医師に訊ねてみる。首を振るだけだった。

*

病院での発表の後、取材本部の旅館に戻る道筋には、流行歌「お富さん」の旋律が流れている。

「粹な黒髪 見越しの松に あだな姿の洗髪……」

それは奇妙な対照だった。

*

九月二日午前、新聞、テレビ、ラジオ、ニュース映画などの代表取材。

私はマイクを握って病室に入る。二〇畳あまりの広さだ。

久保山さんがベッドに一人。黄ばんだ顔。閉じた瞼。枕元にすずさん。夫を見つめている。妻はひたすらに看取りつづける他になすすべはない。時が緊迫を刻んでいる。

久保山さんのあえぎ。酸素吸入のフラスコの中から、泡立つ空気の色。

私はそこにマイクを差し出した。くぐもったポコポコという響き。それがラジオで伝えられる唯一の生きている証だった。

*

この頃、ラジオが放送の主役だった。午後七時過ぎからの録音ニュースを、多くの人々が聴いていた。

だからこそ、良い病状を伝えられないことを後ろめたく思ったりしていた。

*

九月二三日午後六時五分、久保山さん死去の発表。

死因は、放射能症。所見として身長一五七センチ、体重五二キロ、全身に無数の火傷、死の直前に白血球が異常に増えたという。

二人の医師の眼に光るものがあった。一瞬、記者団も沈黙した。すぐに誰もが本社への連絡にと駆けだした。

*

二六日午後一時三五分、遺族は、東京駅から東海道本線豊橋行きの普通列車の三等車両に乗り込んだ。

すずさんの膝には遺骨の包み。身じろぎもしない。

列車は一つ、一つとすべての駅に停車していく。そこには深く頭を下げて、手を振る人びとの群がりがあった。すずさんは、そっと黙礼して応える。

午後六時五分、列車はようやく故郷焼津の駅に到着。

三月二八日、故郷を後にして一八一日目のことだ。

それからしばらくして、また焼津を訪れた。

*

自宅からほど遠くない、菩提寺・弘徳院の墓所に遺骨が収められた。僧侶の読経、漁協の関係者、近隣の人の声を収録、仕事は終わった。

私はふと思いついて、寺の後背にある虚空蔵山の小径をたどった。山頂からは、太平洋を一望できる。船舶無線電信発祥の碑があった。

久保山さんもこの碑を見て無線技術者として身を立てることを志したのだろうか。

日本本土から四千キロ離れた太平洋の漁場から、久保山さんは電鍵を叩き、ツートト、ツートツートとモルルス信号で漁獲と安否を送り続けていたのだ。麓から吹き上げてくる風に乗って波の音。私の耳には、焼津漁協の通信室の、絶え間ない信号音が、それに重なって聞こえた。（作家・元TBSニュース・チーフディレクター）



平和博物館市民ネット 交流会開かれる

各地の平和博物館スタッフ、研究者などで作る平和博物館市民ネットワークの交流会が、12月1、2日に名古屋市の「戦争と平和の資料館 ピースあいち」で開催されました。

「ピースあいち」は、今年5月にオープン、NPO 法人平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会の数年来の運動により建設されました。

交流会には、全国から60名余が参加し、展示の見学につづき、2日間にわたって報告と質疑、懇親会などが行われました。

第五福竜丸平和協会からは、藤田秀雄副会長（平和の文化をつくる会会長）が出席、安田事務局長が「還暦を迎えた第五福竜丸、展示館の活動」を報告しました。

【おまな報告】

山辺昌彦「07年の平和博物館での戦争関係特別展の動向」、南守夫「90年代以降の戦争博物館の動向」、池田恵理子「国際連帯活動とアクティブ・ミュージアム運動」、浅川保「山梨平和ミュージアム開館の意義」、山根和代「国連での平和教育シンポジウムほか」、安斎育郎「イタリアでの原爆写真展、08年秋の平和博物館世界会議について」

このほか、わだつみのこえ記念館、東京大空襲戦災資料センター、立命館大学国際平和ミュージアム、太平洋戦史館などから参加がありました。

米CBSニュースが取材

企画展「手紙-子供たちが見たビキニ事件」に展示されている内海愛子さん（恵泉女学園大学名誉教授・日本平和学会）の手紙について、アメリカのテレビ局CBSニュースが取材しました。

当時内海さんは中学1年生で、久保

山愛吉さんへのお見舞いの言葉とともに「広島長崎についても解決していないにもかかわらず、またも核実験の被害に遭った」ことへの憤りをしたためていました。手紙を書いた当時の内海さんの心境や現在の核問題などについてのインタビューと見学に来た子どもたちを撮影しました。

『ビキニ事件の表と裏』増刷！

7月に出版された、第五福竜丸元乗組員大石又七さんの『これだけは伝えておきたい！ビキニ事件の表と裏』（かもがわ出版）の第二刷ができました。皆さんの協力をはじめ、大石さんが講演先で普及をすすめるなどの努力が実ったものです。この本がよりたくさんの方に読んでもらえるよう、近隣地域の図書館へのリクエスト等を引き続きお願いいたします。

東視協青年学生部「平和の集い」で第五福竜丸のはなし

11月24日、東京視覚障害者協会青年学生部による「平和を考える集い」が、東京都障害者福祉会館で開催され、市田真理学芸員が第五福竜丸とビキニ事件について講演しました。

参加者からは「死の灰の大きさは？」「船は腐らないのですか？」など質問がつづきました。

つどいでの交流から、さまざまな個性を持つ人が活用できる展示館を目指し、「触れる展示」を増やす必要性などの課題も発見できました。

ご寄附をありがとうございます

吉永小百合さんの原爆詩を読む活動をささえる「第二楽章を語り継ぐ会」より、第五福竜丸の活動をひろげるためのご寄附をいただきました。

和歌山県串本町で開催された第五福竜

丸建造60年を記念するコンサート（みんなで楽しむコンサート実行委員会主催）からご寄附をいただいたほか、コンサートの収益でビキニ事件の関連書籍を購入し、地域の学校図書館に贈呈したとのことです。また、横井久美子さんのコンサート「メッセージライブIII」からもご寄附をいただきました。

来館者の感想から

- ◇わずか半世紀前のできごとを忘れず、早く世界平和がくる未来を願ってやみません。この地球からすべての核を廃絶してほしいです。（東京・42歳・女性）
- ◇核兵器という言葉に最近鈍感になっている自分に気づきました。（沖縄・40歳・男性）
- ◇絶対に水爆原爆はやってはいけないと思った。このひげきを忘れずにいたいです。（茨城・13歳・女性）
- ◇自分の名前の書いてある署名簿が展示してあり感動しました。いまもって平和を叫ばなくてはならない人間のおろかさ！今日は厚労省での原爆症認定を求める集会に参加してきました。（北海道・66歳・男性）
- ◇展示してある手紙を読んで、ひがいにあったのにお金をもらってよかったとねたんでいる人がいるのを知ってびっくりしました。（小学4年生・女性）

防火管理資格講習を受講

第五福竜丸平和協会は、消防法の定めによる防火管理者を第五福竜丸展示館に置くための資格講習を安田事務局長が受講し11月28日、城東消防署に選任届けをおこないました。

今後、防火管理計画の立案と自衛消防訓練の実施など、協会役職員とボランティア・メンバーの協力も得て、日常的な防災活動をいっそう強化します。